

平成 19 年度 第 2 回高知県人権教育推進協議会まとめ

日時：平成 19 年 10 月 11 日（木）

13 時 30 分～16 時 30 分

場所：高知会館 3 階 飛鳥

「不登校の子どもとその家族をどう支援していくか」

子どもが学校に行けなくなったとき、地域のスポーツ少年団など仲間がいる場所があることで随分助かった。また担任の先生との関わりだけでは解決しないときに教頭先生が子どもと学校をつないでくれた。大半の保護者は担任の先生としか日常的には付き合いがない。そこを上手につないでいけるような窓口があるとよいと思う。

私は高校時代に不登校であった。理解ある先生がいてくださり、弱音を吐けたことがありがたかった。クラスの雰囲気になえられる子どもばかりではないことを今感じる。子どもが否定されない場所やいつでも受け入れられる場所をつくっていきたいと思う。子どもが秘密を持てる場所、その秘密を子どもたちの見えない地下でつなぎ合いながら大人側がネットワークを組み、子どもを支えられるようにしたい。

学校に行かないと自分で意思表示をしている場合は子どもにエネルギーがあり、問題が解決しやすい場合が多い。行きたいけど行けない状況を見ると、一つには親が子どもの養育に関心が低く、子どもの教育ことを熱心に考えられていない状況がある。

子どもたちは、友だちと仲良くしたいという気持ちはあるが、嫌われないよう顔色をうかがい付き合っている場面が多い。激しい口調で人に暴力的にしか言えない子どもも、結局は自分が認めてもらいたい弱い子だというとらえ方もできると思う。

母親の子どもへの教育には、これまで自分がしてもらった生育暦が出て、苦しんでいるパターンが多いように思う。「子どもにこういうふうに接してあげて」という前に、お母さん自身の気持ちを楽にできるかわかりができたらいいと思っている。言葉で言ったらカウンセリングとなると思うが、聞き方一つ、話の受け方一つで関係が変わる経験をしている。親を支えていく場所と人をつくらなれないといけない。親のつながりをまとめてくれる、働きかけをしてくれる役割・体制を必要としている。

私の娘の友人が今年急に、学校に行けなくなった。担任の先生とも話したが、原因も分からず、周りの同級の保護者と何とか行かしてやりたいねと話すが、かわりの仕方がなかなか難しい。こういった例が多分県内の学校や地域の中でたくさんある。

原因探しをしないで欲しい。私が不登校になった時、原因探しをされたことが、今でもしんどい思い出として残っている。まず休み始めたときに、本人を責めないでほしいことと、心配し過ぎないでほしいと思う。母親が子どもの不登校を、自分の責任じゃないかとすごく悩んだが、その悩んでいる親を見ることがすごくつらかった。不登校を解きほぐす人間は全くの第三者であるべきではないのかとも思う。

私が今仕事場で毎月保護者会をしているが、親同士のつながりができ、雑談ができる。子どもにかかわり、いろんなことを打ち明けられる場所というのを設けられたらいいと思う。

保育のときから不登園というのがある。母親が地域の中に友達関係、親しく語り合える仲間がないことから自信を持ってない。親のそういう心理が子どもに伝わるのか、子どもも自信を持って保育所へ行けていない状況がある。保護者が自信を持てる、不安がないようなつながりをつくるのが大事だと感じる。

子どもは保育者や教職員など、かわり出会う人との出会いで人間が変わっていくと思う。人を大切にする、人権教育を本当に学習している教職員集団なり地域社会であれば、嫌な思いをする子

どもや親も出てこない。お互いが自信を持って笑って語り合えるネットワークはなかなか難しいことだが、一人一人が小さいつながりを持つ必要があると思って、今動いている。

相談機関としては、県の教育委員会に心の教育センター、行政には児童相談所がある。19の市町村には教育支援センターがある。これは不登校の子どもたちの自立を目指して、相談を受けたり、通所したりするところで、以前よりも随分広がりは出てきている。

問題は、そこへ行けないところに、非常に奥深い根がある。それをどのように解決していくか、これは大きな問題だと思う。

不登校を経験した高知大学に合格した2人は、「学校へ行けなくても、多少はみ出しても大丈夫と言ってくれる家族が欲しかった。失敗してもいい、人と違う自分があった方がいいじゃない。いろいろな生き方があっていいんだよと言ってくれた中で立ち直れた」と言っている。支援センターは子どもの自立と学校への復帰を目標としてやっている。通所の子どもたちも、学校に行っていないことに対して非常に不安を感じている。中学校を卒業したら、多くの人が高等学校へ行っている。

子どもが今どのような状態で、どのような支援が必要であるか。そのことで学校と支援センターと家庭が連携をとらなくてはいいけない。この中心は学校の先生だ。そのために子どもと先生、子どもと親がマンツーマンでかわれるような時間が必要だ。

田舎というのは何でも言えるようで、逆にガードしてしまう面があり、学校を訪問しても学校の状態を率直に聞かせていただくことができない。学校に余り関係のなくなった立場の者は入っていくにくいし、逆に向こうからもこうですよということはいえないと思う。PTAは、行事に協力するだけでなく、お互いに同じ立場の子どもを持つ親同士、何でも話せるというネットワークにできないかと思う。

私の子どものときも不登校がいたが、それを助けたのはわれわれ子どもであった。例えば、「あれは近ごろ休んじゅうが、どうなっちゃらや」と言って、親より先に動いたが今はないのかな。原点としてそういう何かがあった。そういう子育てをしていくことが、解決につながるのではと思う。

「不登校を生じさせない取組(学校づくり)」

高知市の5年間の不登校対策の資料。

学校において日々の出席管理には特に力を入れている。家庭訪問、それから何よりも授業改善を進めている。不登校問題に全力を挙げることによって、校内暴力、街頭補導の件数が少なくなっている。1人の子どもを放らない、かわり切るというスタンスを明確にし、確かな人生保証をするためにも不登校問題に果敢に挑戦をしていくという決意を持つことが大事。

高知市の研究所は家庭訪問の仕方、Q-Uの活用の仕方、気持ちよく2学期をスタートするため方法、効果のあった取り組み例等を載せた資料を高知市内の全教職員に適時配付している。

30日以上休んだ場合は、不登校だけでなく病気やその他も一緒に全部押さえている。

私の学校では、空き教室に仕切りを立てて、小さな部屋をつくった。不登校気味な子どもが来た場合に教員免許を持ったベテランの退職教員の方が教員補助員として対応している。民生委員、保護司、高知市教育委員会が委嘱した補導委員の三者をお願いして学校に来て、子どもたちを見ていただく、コミュニケーション隊をつくった。

中学校から見ると、就学前と小学校での子どもの教育をがんばってきたが、中学校になって息切れしている家庭が多い。

居場所づくりでは、児童館、隣保館、公民館等で、教師も派遣し、今までの子ども会を昼やってもいいと思う。また地域にある老人ホームをいい意味でオープンにしたらどうだろう。

また、不登校だけでなく子どもの問題に関わり、学校は、児童相談所、補導センター、保健所、福祉課等の職員、ケースワーカーなどとの連携充実が必要だ。

学校の取り組みとして基本的に大切なことは、一人一人の先生の人間の幅を広げ深めるところだ。

人間としての力を付けるという点において、大学ではどのように行われているかを洗い直してみる必要がある。また、採用後5年次、10年次、15年次と研修が組まれているが、生徒・児童理解力、子どもを見る鋭い感覚をどう育てるか、先生の力を大きくする方法をいろんな角度から具体的に考える必要がある。県のほうも計画を進めていると思うが、指導する先生の層が少なく、弱い。管理職には経営面、渉外面等忙しく、一人一人の先生に細かく立ち入った指導の時間がないと思う。NPOや教育センターを窓口として、経験豊かな退職教員のチームが常時待機し、県内の学校に対応していく状況が可能であれば現場は助かると思う。究極的には学校の不登校を生じさせない取り組みの基本は、一人一人の先生の力量に負うところが大きいので、その対策を考えていただくことが重要だ。

高知市では高知シニアネットワークという、退職した先輩の組織があり、書写や花壇作りなど学校の要望に合わせた内容で協力してもらうことができる。

不登校を生じさせない組織、学校づくりという課題では考えにくい。なぜ生じるかとか、不登校がそんなに悪いのかかかと思ってしまうと、このテーマではうまく考えることができなかつた。「一人一人の子どもが将来自分の人生を自らの力で歩いていくことができる」ためと考えたらいろいろ浮かんでくると思う。

担任の先生しか物を言える人がいなかったら、ちょっとの感情のこじれがあったりすると出口のないトンネルに突っ込んだようになる。またプライドのある保護者の場合には、悩みを出すことが自分の恥のように感じ、子どもにも傷がつくような感覚を持っている。保護者の中でも物が言える人を常につくっておくような配慮をしていく。PTA 役員の時には、先生方の得意なことや学生時代の話ゲームで引き出すことで、保護者と先生との関係の入り口を広げることを狙った。学校と家庭の間がもっと親密になり、行き来がしやすくなるということは、子どもにも親にもいいことだ。こうした信頼関係をつくっていく方法を、たくさん発信できる組織づくりへ向けての動きというのができないかと思う。

学校は子どもの楽園じゃないと駄目。子どもが進んで行くところじゃないと。これが原点だと思う。

中学校は教科ごとに先生がいる。子どもは、この先生なら僕の話聞いてくれるかもしれないと選ぶことができる。小学校も4年ぐらいからは教科ごとに先生が変わるシステムにすれば何か新しい流れが出てくるかもしれない。逆に親の立場からしても、担任の先生以外の複数の先生を知ることができる。

職員室の敷居を高いと感じる保護者が多い。先生方一人一人の個性を出してもらえたり、引き出す場というのもあったら面白いなと思う。

社会を変える、親を変えるとってなかなか変えることはできないが、努力を続けていかなければならない。先生も、「お宅の子どもはこういういいところがあります。こういう優しさがあります。こういうところがこんなに伸びましたよ。」という繰り返しで信頼ができる。やっぱり教育は人なりだ。

いろんな場所へ出かけられずに悩んでいる、家に親子で引きこもっている家族をどういうふう掘り起こしていくかということが大事なことだと思う。そうした人を大事にする人権感覚と人権意識が教職員、保育者であれば子どもたちは救われるということを確認している。だから研修でも人を育てる、教職員自らを育てていく研修と人権研修をたくさんたくさん持ってほしい。

不登校の子どもは多いが内容的には随分変わってきたと思う。

先生方に子どもに対する対応について、入学時いきなり中学生扱いすることなく丁寧に話すことなどをお願いしてきた。夏休み明けの不登校の数がぐんと減っている。学級、学校に居場所があるということ、部活動も一つの居場所として大切にしている。美術部で居場所を見つけた生徒は看板づくりに取り組んだ。

授業研では、専門性や教科の枠を超えようと、授業後グループに分けて、子ども一人一人に焦点を当てて小集団で意見を出すようにした。活発にいい雰囲気では会ができるようになり、子どもの人間関係をつくる前に、教師の人間関係をつくるのが大事だと感じている。

子ども同士のかかわりについても、生徒会・委員会活動の活発化し、行事で育てるということで体育祭では、時間もかかるが学級を解体し、人間関係をつくり上げていっている。

学校に行きたくない原因を誰かがしっかりと押さえることは大事で、その解決方法を見出してあげないといけないと思う。

「受容」という言葉がある。障害とか病気とか、その本人の障害を受容することももちろんしんどいけれども、家族にもまた大きなしんどさがあり、いろんな子どもたちが集まっている学校には学校としての受容をしていくしんどさもある。その家族や、学校の教員を支援する体制というのが大事だと思う。

自分の居場所というのは、学校や家庭、何かの集いなどどこでもできると思う。自分が居場所だと感じられるのは居心地がいいところであって、自分の存在がきちんと人に映っているところ。生きていてもいいんだよ、あなたがとても大事なんだよと、その人が感じて成立する。そういう居場所づくりをしていける温い人間、それが人権教育なんだろうと思う。

不登校を経験して単位制高等学校に来た生徒が、変わろうとしていることを大事にし、その時を逃さない教職員の目と、支援できる体制が学校に必要なと思う。全日制高校の、教師主導で引っ張っていく指導だけではいけない。不登校の子どもや課題をもって入学してきた子どもには、教師側が寄り添う指導を大事にしたい。子どもや親の願い思いを大事にして、それを分かち合うような姿勢が教職員にないと、子どもは変わり成長していかないと思っている。

特別支援の必要な生徒、あるいは不登校の経験のある生徒についてはどのように授業や試験に臨むか話し合いをしている。第1案、第2案、第3案と学校で持ち、親と子どもに相談をし、話し合いをして、ベターな方法をとっていく。一遍に成果を求めないで一步一步取り組んでいきたいと思う。確認していることは縁を切らない指導をやっていくこと。子どもが取りあってくれなくても保護者には電話もできるし、行くこともできる。単位制を活かした指導、単位制であるが上に時間にゆとりはある。子ども、保護者と会話する時間は十分あると思うので、そこを大事にしていきたい。

サポートセンターでは、年間五、六百件ぐらいの相談を受けている。一番多いのが学校に関する相談で、いじめ、学校の先生に対する意見、不満などが多い。私たちはそういう保護者の方と学校をつないでいくことを目指している。

聞いていると、学校の先生の問題ではなくて、お母さんが抱えている課題、夫婦関係や祖父母との関係などが出てくる。親の気持ちを吐き出させることで子どものほうに向かい合える。

学校に行っている間は先生などがかわってくれるが、学校をやめると、学校と縁が切れて行く場所、居場所がなくなる。学校にいる間に「困ったときにはいつでも相談に来れるんだよ」というようなメッセージを届けている。

学校の先生方には、地域の方々やいろんな機関があるので、ぜひ利用し、外からの違う視点で見て、力を借りるとまた違うやり方が見えてくる。また、学校の先生は短い期間で何とかしようと考えてるが、少し長い目で見ると、子どもも親もありがたい。

不登校になった親を支えるのは大事なことだ。子どもの不登校を受け入れられない親もたくさんいるので、そこを支えていくには学校の先生方との信頼関係、あるいは学校ではない場所で信頼関係を取り戻していく作業に時間がかかるので長い目で見る必要がある。

不登校について 子ども、その家族の支援、そして学校の取り組みということでは、支援体制、ネットワークと同時に学校の教職員の一つの運営的な資質が強調される。言い尽くされた言葉だが、学校というのは教師が変われば学校が変わる、学校が変われば子どもが変わる、子どもが変われば保護者が変わる、地域が変わるといって、全部これに通じている。